健康のお話

アナフィラキシーに新薬登場

沼尾 利郎

1 アナフィラキシーとは

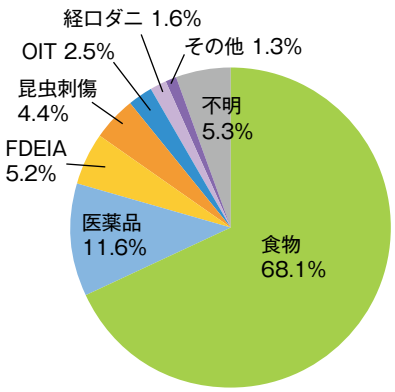


アナフィラキシーとはアレルゲン（アレルギー反応を引き起こす物質）が体の中に入った後に急激に複数の臓器に重い症状が現れる全身性の過敏反応のことであり、血圧低下や意識障害などを伴うアナフィラキシーショックでは命に関わることもあります。具体的な症状としては皮膚・粘膜症状（全身のじんましん、口唇の腫脹など）の他に呼吸器症状（呼吸困難、ゼイゼイなど）、循環器症状（血圧低下、失神など）、消化器症状（腹痛、繰り返す嘔吐など）等の多彩な症状が、同時かつ急速に進行するのが特徴です（アナフィラキシーは時間との勝負）。しかし時には「皮膚症状のないアナフィラキシー」や「二相性反応」（一度症状が消失してから10数時間後に症状が再発）、「遅発型アナフィラキシー」（アレルゲンに曝露してから数時間後に発症）もあるので注意が必要です。

2 原因と治療

アナフィラキシーの原因には食物、医薬品、昆虫刺傷などがあり、最も多いのは食物です。小中学生のアナフィラキシーのほとんどは食物が原因であり、鶏卵、牛乳、ナッツ類（クルミなど）、小麦、落花生などが多く報告されています。年代別に食物アレルギーの原因は異なりますが、最近では乳幼児のナッツアレルギーの増加が注目されています。一方、X線造影剤や血液製剤、抗生物質などの医薬品が原因となることがあり、食物アレルギーを起こす成分を含む医薬品もあるので注意を要します。アナフィラキシーを起こす代表的な昆虫はハチであり、アシナガバチやスズメバチなどの活動が活発になる夏から秋の時期は特に気をつける必要があります。

■アナフィラキシーの原因物質



アナフィラキシー治療の第1選択薬はアドレナリンです。アドレナリンには血圧を上げる、気道を広げる、アレルギー反応を抑える等の作用があり、重症例では速やかな投与が必要となります。これまでアナフィラキシーの緊急治療薬として広く使用されてきたのは自己注射薬エピペンですが、注射への恐怖心や心理的ハードルの高さ、使い方への不安などが課題として指摘されていました。

3 新薬（アドレナリン点鼻薬ネフィー）への期待

近年では急性期レスキュー分野での経鼻製剤の即効性が注目されており（てんかん、低血糖など）、この背景には製剤開発に必要な技術革新（高性能な吸収促進剤、専用器具の改良）があります。アナフィラキシーの新薬である点鼻薬ネフィーは鼻にワンプッシュするだけで鼻粘膜の豊富な毛細血管からアドレナリンが速やかに吸収されるため、注射薬エピペンと同等の効果が得られます。さらに点鼻薬の利点として、これまで注射という医療行為への不安やためらい等のエピペンの課題が大きく改善することが期待されます。

エピペンやネフィーはアナフィラキシーが出現したとき一時的に症状をやわらげ、ショックを防ぐ効果が期待できる補助治療薬なので、使用後は必ず医療機関を受診する必要があります。またどちらの薬も事前に所定の講習を修了した登録医でないと処方できないため、どこの医療機関でも薬が出せるわけではありません。

いざという時に備え「もしも」への準備が命を守るのは、災害も医療も同じということですね。



㈱アルフレッサファーマ



沼尾 利郎（ぬまお としお）

日光市生まれ。宇都宮高校、獨協医大卒業後、米国留学を経て塩谷総合病院副院長、国立病院機構宇都宮病院院長を歴任。現在は同病院名誉院長として宇都宮セントラルクリニック等で診療。専門は呼吸器、アレルギー、スポーツ医学など。